

歌 会 始
 梅 不 待 春 暖
 寒 風 中 開 花
 皇 恩 深 於 海
 皇 民 同 詠 嘉

民の章

厚木市 荒井 一雄

おもふ皇こそうれしけれ
 いまこそおもへ皇の健康
 梅は、春暖を待たず、
 寒風の中に開花す…
 天皇陛下の恩愛は、
 海於も深し…
 天皇陛下と国民が
 共に詠じ、言祝ぐは、
 まさに吉祥なり…

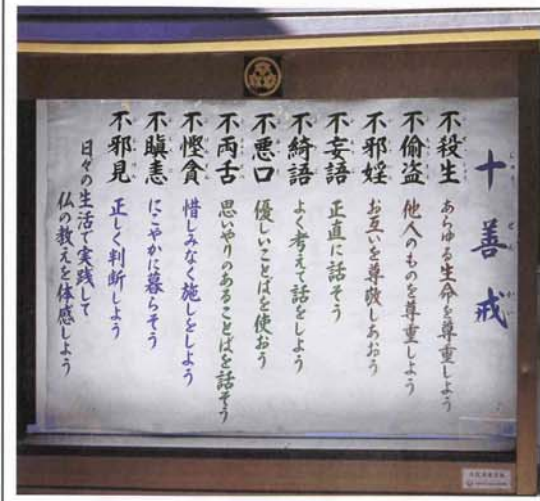
折り折りの記 (89) 波多野 重雄
 翁も媪もケーブルカーで初詣
 昨年十一月二十四日、朝五時頃時雨は五十四年ぶりの初雪となる。午後二時頃止み(約八糶)、高尾山は(約二〇糶)忽ち銀世界。紅葉が雪化粧して別世界の様相を呈し、朝日に雪が傾れるのを見た。昨年九月の高齢者(六五歳以上)人口は三、四六一万人となり、人口比二七・三%となる。この影響は薬王院の初詣にも影響し若者は健脚、翁や媪らをケーブルカーでピストン輸送する。参拝客は近年平常化し、外国人客の増加傾向。お山は真昼の明るさだ。(高尾山健康登山の会長)

ある時、王は嫉妬心のあまりに、王妃に向けて弓を引きます。しかし、妃は少しも恨みに思わず、むしろますます慈悲の心を起して、王の邪見と、来世で受ける苦しみと同情しました。すると、矢は向きを変えて、王の胸に刺さり、逆に死んでしまわれたのです。
 世間の諺にも、
 握れる拳、
 笑める面に
 当たらず。

ここに登場する王と妃は、対照的な心柄でした。邪見な王は、日頃から憎しみに満ちた表情をし、対して、慈しみの心(慈悲心)を身につけていた妃は、心の底からの笑顔で人と接しています。これは邪見の林に迷い込まない、お手本となる言動と言えるでしょう。揺るぎない慈悲心によって、周

りをも幸せにする妃の行いは、仏様そのものであったと考えられます。
 一切の悪業は、
 邪見を因と為す。
 (『涅槃経』)
 (全ての悪い行いは、邪悪な心かともである)
 一月は「睦月」とも呼ばれます。一説では、新年を迎えて人々が仲睦まじくするから名付けられたとか(『奥義抄』)。しんしんと降る穢れなき雪のように心を浄め、心温かな一年の第一歩を踏み出してみましよう。
 (栃木北部教区普濟寺)

JR高尾駅 交通安全祈願
天狗面被い法要厳修
 十二月十一日(日)



十善戒の教えを守り少しづつ心が清められる

法の水荖 (55) 大正大学講師 高橋 秀城
 四年は、東京でも五十年ぶりに十一月初雪を観測しました。高尾山の山頂でも二十センチの積雪があり、紅葉が十足早く雪化粧しました。
 昨年(去年)は、東京でも五十年ぶりに十一月初雪を観測しました。高尾山の山頂でも二十センチの積雪があり、紅葉が十足早く雪化粧しました。
 しるすとならし
 雪の降れるは
 (『万葉集』葛井諸会)
 (新しい年の初めに、今年(今年)の豊作の吉兆なのでしよう。雪がこのような降り積もるの(は)皆(みんな)さんは、雪の時節をお好きでしようか。豪雪

地帯の方々は雪下ろしなど大変な思いでしようが、新年の大雪は、古くから良い兆しの現れとして喜ばれても来ました。歌にある「豊の稔」とは、「草木が豊かに実を結ぶこと」を表します。深空から舞い降りる雪の一片は、豊かな秋の実りを予感させるものでもあるのでしよう。「稔」には「これまでの努力が報われます」という意味もあります。新年に真っ白な雪景色が見られたら、今年一年の幸いを心静かに祈りたいものです。高尾山薬王院においては、元日から大山隆玄御貫首・大導師のもと「新年特別開帳大護摩供」が執り行われます。僧侶と信者の皆様とが一心にお経を唱え、世界平和や五穀豊穰、家内安全や無病息災などの祈りを捧げます。新しい年の始まりを皆で祝い、新たな夢と目標を胸に、この一年の幸せを願います。

「邪見」の「邪」は「心がねじ曲がっていること」、「見」は「ものの考え方」という意味です。こうした「間違った考え」を持つと、どのようなことになってしまうのでしょうか。
 誰かに意地悪をされた

り、馬鹿にされたりすることを「邪慳にされた」と言います。「邪見」と「邪慳」(邪険)は漢字は異なりますが、思いやりがなく、無慈悲な行動(邪慳)は、全て「間違った考え」(邪見)から引き起こされたものです。「邪見の角」「邪見の刃」という言い回しがあるように、邪見は物事を荒立て、刃のように危害を加えます。邪見の心は、他人を傷つけるのです。
 ただ、邪見の心はなかなか本人には見えませんが、相手に傷を負わせても、自分では正しいと思っている場合もあります。どこからが正しくて、どこからが邪な考えになるのかも曖昧な中で、何をお手本としたら良いのでしょうか。
 昔(天竺(インド))には、ある国王の妃がいらつしやいました。慈悲の心が深く、あらゆるものに哀れみの心を持ち、清らかな信心を保ち、仏・法・僧の三宝を敬っておられま